凡例

一、本書の底本は、浄土宗総本山知恩院が所蔵する『法然上人行状絵図』四十八巻を使用した。

二、活字化するに当たり、常用漢字体を使用し、俗字・略字・変体仮名等は通用の字体に改めた。ただし躍り字は、漢字は「々」、仮名は「、」「〳〵」を用いた。

三、読解に資するために、適宜に句読点を施し、引用文や会話文に「　」『　』などを付けた。また清音の仮名に濁音符を付けたが、現代と異なり、中世において清音または濁音で発音していたと思われる語は、それを尊重した。

四、仏教用語や固有名詞には現代仮名遣いによる振り仮名を付し、古語や歴史的仮名遣いの仮名には漢字を当てるなど、なるべく読み易くした。

五、原文の割書き・注記は〈　〉で括り、一行書きとした。漢文体の文章は、先に原文を掲げ、その後ろの（　）内に訓読文を旧仮名遣いで入れた。

六、原文に見せ消ちしてある文字は翻刻しなかった。

七、漢字の振り仮名は、通読に便宜を得るために努めてつけたが、釈迦・如来・阿弥陀・観音・地蔵・菩薩、往生・帰依・経論・化身・供養・畜生・念珠・凡夫・末法のごとく誰もが容易に読める仏教語には付さなかった。また語によっては訓読・音読、音読でも漢音・呉音のいずれにすべきか判断つかない場合は、私見によった。

八、底本の誤字（当て字）は、正字を右傍もしくは脚注に付記した。

九、巻第十八の『選択集』『無量寿経釈』、巻三十一「七箇条起請文」の読み下し文の仮名書きに対しては、なる

べく原著の漢字表記を当てた。典拠が判明している文章も同様である。

十、漢字の「見」と草書体の「み」の判別は、原則として寛永十三年刊本に従った。

新訂　法然上人絵伝　目次

凡　例

法然上人行状絵図

第一

序……三

父母仏神に祈て上人を懐妊し給ふ事……四

御誕生の時白幡天より降る事……五

小児の時勢至丸と号する事……五

父時国定明が為に夜討にあへる事……六

時国最後遺言の事……七

第二

定明逐電念仏往生の事……八

小児菩提寺観覚の室に入給事……八

観覚小児の器量を見て台嶺に送る事……九

小児上洛の時道にて法性寺殿へ参りあひ給ふ事……一〇

第三

小児叡山持宝坊に入給事……一一

小児四教義をさづかりて不審をなす事……一二

持宝坊小児の器量に驚きて皇円の室に送る事……一二

小児十五歳剃髪登壇受戒の事……一三

十六歳の時まづ三大部を学び給事……一三

十八歳西塔黒谷慈眼房の室に御遁世の事……一四

第四

上人一切経御披閲の事……一六

嵯峨清涼寺に御参籠の事……一七

法相の蔵俊二字を奉らるる事……一七

三論の寛雅秘書を附属し奉らるる事……一八

華厳宗の慶雅二字を奉らるる事……一八

御室より上人を御招請上人御辞退の事……二〇

第四十五
勢観房源智附法の事……三八二
遠江国蓮花寺の禅勝房の事……三八五
醍醐の俊乗房重源附法の事……三九四
第四十六
鎮西の聖光房弁長附法の事……三九七
聖光房帰国の後背宗の邪義を記して上人に御証判を請れし事……三九八
聖光房念仏授手印撰述の時善導大師影現し給事……四〇〇
筑後国善導寺建立の事……四〇一
聖光房念仏往生修行門製作の事……四〇三
第四十七
西山の善恵房証空附法の事……四〇六
善恵房白木の念仏巧説の事……四〇七
津戸三郎入道尊願の尋に付て善恵房返状の事……四一〇
善恵房恭敬修を好み精進修行の事……四一七
第四十八
法性寺空阿弥陀仏和讃念仏の事……四二〇
空阿の臨終行儀の尋に付て上人御返状の事……四二一
上人常に空阿の無智念仏の化導をほめ給し事……四二二
空阿兼て死期を知て奇瑞往生の事……四二三
嵯峨の往生院念仏房の事……四二四
真観房感西の事……四二五
石垣の金光房の事……四二六
法本房行空成覚房幸西は一念の邪義を立て門徒を擯出せられ覚明房長西は諸行本願義を執して選択集に違背せる故弁門徒の列に載ざる事……四二六
解題……四二九
あとがき
索引（僧尼・人名・典籍・寺院・地名）

法然上人行状絵図　第一

夫以、我本師釈迦如来は、あまねく流浪三界の迷徒をすくはむがために、ふかく平等一子の悲願をおこしましますによりて、忽に無勝荘厳の化をかくして、かたじけなく娑婆濁悪の国に入給しよりこのかた、非生に生を現じて、無憂樹の花(笑)ゑみをふくみ、非滅に滅をとなへて、堅固林の風こゝろをいたましむ。在世八十箇年、慈雲ひとしく群生におほひ、滅後二千余廻、法水なを三国にながる。教門(品異)しなことに、利益これまち〳〵なり。そのなかに聖道の一門は、穢土にして自力をはげまし、濁世にありて得道を期す。但をそらくは、とき澆季にをよびて、二空の月くもりやすく、こゝろ塵縁にはせて、三悪のほのをまぬがれがたし。煩悩具足の凡夫、順次に輪廻のさとを出ぬべきは、たゞこれ浄土の一門のみなり。これにつきて、諸家の解尺、蘭菊美をほしきまゝにすといへども、唐朝の善導和尚、弥陀の化身として、ひとり本願の深意をあらはし、我朝の法然上人、勢至の応現として、もはら称名の要行をひろめ給ふ。和漢国ことなれども化導一致にして、男女

［序］

流浪三界　迷いの世界に生死を繰り返す

無勝荘厳　釈尊の過去世の浄土

娑婆濁悪　五濁と十悪がはびこるこの世

無憂樹　この木の下で摩耶夫人が釈尊を産む

堅固林　沙羅の樹林。ここで釈尊が入滅する

三国　天竺（インド）・晨旦（中国）・日本

二空　人も法もともに空である

塵縁　六識（眼・耳・鼻・舌・身・意の認識作用）の対象

順次に　この世の生涯を終えた次の世において

解尺　尺は「釈」の当て字

善導　中国浄土教の大成者（六一三～八一）

貴賤信心を得やすく、紫雲異香往生の瑞すこぶるしげし。念仏の弘通こゝに尤さかむなりとす。しかるに上人遷化のゝち、星霜やゝつもれり。教誡のことば利益のあと、人やうやくこれをそらんぜず。もししるして後代にとゞめずは、たれか賢をみてひとしからむことをおもひ、出離の要路ある事をしらむ。これによりてひろく前聞をとぶらひ、あまねく旧記をかんがへ、まことをえらび、あやまりをたゞして、粗始終の行状を勒するところなり。おろかなる人のさとりやすく、みむものゝ信をすゝめむがために、数軸の画図にあらはして、万代の明鑑にそなふ。往生をこひねがはむ輩、たれかこのこゝろざしをよみせざらむ。

抑上人は、美作国久米の南条稲岡庄の人なり。父は久米の押領使漆の時国、母は秦氏なり。子なきことをなげきて、夫婦こゝろをひとつにして仏神に祈申に、秦氏夢に剃刀をのむとみて、すなはち懐妊す。時国がいはく、「汝がはらめるところ、さだめてこれ男子にして、一朝の戒師たるべし」と。秦氏そのこゝろ柔和にして、身に苦痛なし。かたく酒肉五辛をたちて、三宝に帰する心深かりけり。

［第一図］

異香　かぐわしい香り
遷化　高僧の死去をいう
出離の要路　生死輪廻の世界を離れる肝要な道
行状を勒する　人の行実・業績などを記述する
数軸　多くの巻物。数は「多く」、軸は「巻物」を意味する。実際は全四八巻
［父母仏神に祈て上人を懐妊し給ふ事］
久米の南条稲岡庄　現在の岡山県久米郡久米南町
押領使　地方の乱行の鎮定や盗賊の逮捕に当たる官職
一朝の戒師　天子に戒を授ける高僧
五辛　五種の辛味や臭みのある野菜

法然上人行状絵図　第廿七

武蔵国の御家人熊谷の次郎直実は、平家追討のとき、所々の合戦に忠をいたし、名をあげしかば、武勇の道ならびなかりき。しかるに宿善のうちにもよをしけるにや、*幕下将軍をうらみ申事ありて、心を（発）こし出家して蓮生と申けるが、聖覚法印の房にたづねゆきて、後生菩提の事をたづね申けるに、「さやうの事は、法然上人にたづね申べし」と申されければ、上人の御菴室に参じにけり。「罪の軽重をいはず、たゞ念仏だにも申せば往生するなり。別の様なし」との給をきゝて、*さめ〴〵と泣ければ、*けしからずと思たまひて、ものもの給はず。しばらくありて、「なに事に泣給ぞ」と仰られければ、手足をもきり命をもすてゝぞ、*後生はたすからむずるとぞ、うけ給はらむずらんと存ずるところに、「たゞ念仏だにも申せば往生はするぞ」と、やす〴〵と仰をかぶり侍れば、あまりにうれしくてなかれ侍るよしをぞ申ける。まことに*後世を恐たるものとみえければ、「無智の罪人の念仏申て往生する事、本願の正意なり」とて、念仏の安心こまかにさづけ給ければ、ふた心なき専

［熊谷入道蓮生始て上人の御教化を承りてけしからず泣たりし事］

幕下将軍　源頼朝（一一四七～九九）のこと

さめざめ　涙を流して泣くさま

けしからず　異様だ、感心できない

後生・後世　死後の世、来世

修の行者にて、ひさしく上人につかへたてまつりけり。或時上人月輪殿へ参じ給けるに、この入道推参して、御共にまいりけるを、とゞめばやと思食されけれども、さるくせものなれば、中々あしかりぬと思食て、仰らるゝむねなかりければ、月輪殿までまいりて、くつぬぎに候じて、縁に手うちかけ、よりかゝりて侍けるが、御談儀のこゑのかすかにきこゑければ、この入道申けるは、「あはれ穢土ほどに口おしき所あらじ。極楽にはかゝる差別はあるまじきものを。談儀の御こゑもきこえばこそ」と、しかりごゑに高声に申けるを、禅定殿下きこしめして、「こはなにものぞ」と仰られければ、「熊谷の入道とて、武蔵国よりまかりのぼりたるくせものゝ候が、推参に共をして候と覚候」と上人申給ければ、やさしく「たゞめせ」とて、御使を出されてめされけるに、一言の色題にも及ばず、やがてめしにしたがひて、ちかくおほゆかに祗候して聴聞仕けり。往生極楽は当来の果報なをとをし。忽に堂上をゆるされ、今生の花報を感じぬる事、本願の念仏を行ぜずは、争この式に及べきと、耳目をどろきてぞみえける。

［第一図］

推参　押しかけて参上する
曲者　ひとくせある者
あしかりぬ　まずいことになる
くつぬぎ　履物をぬぐための台
穢土　浄土の対語。けがれた現世
差別　区別すること
きこえばこそ　聞こえてくれば耳に入るのに
しかりごゑ　叱っているような声
禅定殿下　出家した摂政・関白に対する敬称
ただ　とにかく
色題　挨拶。題は「代」の当て字
当来　来世
堂上　御殿に上がること
花報　来世で受ける果報の前に、この世でうける果報
式　事柄、事情

蓮生、念仏往生の信心決定してのちは、ひとへに上品上生の往生をのぞみ、「われもし上品上生の往生を遂まじくは、下八品にはむかへられまいらせじ」といふかたき願をおこして、発願の旨趣をのべ、偈をむすびて、みづからこれをかきつく。かの状云、「*元久元年五月十三日、鳥羽なる所にて、上品上生の来迎の阿弥陀ほとけの御まへにて、蓮生願をおこして申さく、極楽にうまれたらんには、身の楽の程は下品下生なりとも限なし。然而天台の御尺に、『下之八品不可来生（*下の八品は来生すべからず）』と仰られたり。おなじくは一切の有縁の衆生、一人ものこさず来迎せん。無縁の衆生までも、おもひをかけてとぶらはむがために、蓮生上品上生にうまれん。さらぬ程ならば下八品にはうまるまじ。かく願をおこして後に又云、『恵心の僧都すら下品の上生をねがひ給たり。何況末代の衆生、上品上生する者は一人もあらじ』と、*ひじりの御房の仰ごとあるをきゝながら、かゝる願をおこしはて、いはく、『末代に上品上生する者あるまじきに、しかもよろづ不当なる蓮生、いかで上品上生にはうまるべきぞ。さなくは下八品にはむまれじとぐわんじたればとて、あみだほとけもし迎給はずは、第一に弥陀の本願やぶれ給なんず。*次に弥陀の慈悲かけ給なんず。次に弥陀の願成就の文やぶれ給なんず。次に釈迦の

［蓮生上品上生の往生の大願をおこせし事］

元久元年　一二〇四年
鳥羽　京都市南区・伏見区
下の八品云々　実は湛然の維摩経疏記の文
ひじりの御房　上人を指す
なんず　…してしまうだろう

所へはましまさすして、九条殿へのみまいり給事、　（知恩院本）

上人ウルサキコトニ思給テ、九条殿へマイリタマハサランタメニ、房籠トテ別請ニオモムキタマハス、（中略）サ様ノ御時ハ子細ニ及ビハンヘラスト申サレケレハ、（中略）門弟正行房心中ニ、哀レ房籠トテ余ノ所ヘハマシマサスシテ、九条殿ヘノミ参給コト、　（寛永十三年本）

上人うるさき事に思給て、九条殿へまいりたまはざらんために、房籠りとて別請におもむき給はず、（中略）さやうの御時は子細に及ひ侍らずと申されけれは、（中略）門弟正行房心中に、あはれ房籠りとて余の所へはましまさずして、九条殿へのみ参給こと、　（元禄十三年刊本・翼賛本）

江戸期の刊本は、初学者に読み易からしめるために、仮名遣いを改め、漢字・仮名を適宜に変換し、文字を補うなどの改訂を行なっている。意味に差異を生じなければ差し支えないという鷹揚さの現われであろうが、現代の原文主義からはほど遠いテキストである。

近代に入り、活字印刷の『行状絵図』が刊行されて、普及性を一層高める。望月信亨氏編纂の『法然上人全集』（明治三十九年刊、浄土教報社）に「法然上人行状画図」が収められ、梶宝順氏の編になる『法然上人行状画図』（明治四十一年刊、東光社）が単行本として刊行された。後者は掌中版とも称すべき小型の本で、「索引」「法然上人年譜」及び『縁起』を付載している。『浄土宗全書』十六（明治四十三年刊、浄土宗宗典刊行会）に『翼賛』『縁起』『目録』が収められた。そして望月信道氏の編纂する『浄土宗聖典』（明治四十四年刊、無我山房）にも、「法然上人行状画図」が収録されている。

こうした相次ぐ出版によって、『行状絵図』が宗門人の手に取る身近な存在になったが、活字印刷本の底本には、いずれも義山の校訂にかかる「義山本」（元禄十三年刊本・翼賛本）を用いていた。それは義山本と同様の書名「――画図」で明らかである。厳密な意味での知恩院本の翻刻は、藤堂祐範・江藤澂英の両氏が当麻本・翼賛

本と校合した『大正新校法然上人行状絵図』（大正十三年刊、中外出版）が最初である。つづいて『日本絵巻物集成』第十五巻・第十六巻（昭和六年刊、雄山閣）に『行状絵図』が収められた。知恩院本による絵詞は井川定慶氏の校訂にかかり、さらに同氏の該博な知見に基づく本格的な解説が施されている。これまでの活字印刷本は『縁起』を収録することで「解題」に代えていたが、ここに初めて解題らしきものをともなう知恩院本を底本とする『行状絵図』が登場した。

これ以後、知恩院本を直接に用いるのが主流となる。なかでも井川定慶氏編の『法然上人伝全集』（昭和二十七年刊、同刊行会）は、『行状絵図』をはじめ各種の法然絵伝の詞書をも網羅しており、学界を最も裨益した。しかし、魯魚の誤りがなきにしもあらず、原文対照が必要である。例えば梶山昇氏編『法然上人行実』（平成十七年刊、浄土宗）は、建久二年（一一九一）条に「上人、後白河法皇に授戒」の綱文を立て、同書四四頁の「建久二年正月五日より、御悩ありけるに」云々を引くが、建久三年の誤植である。

『行状絵図』は仏教用語や古典文法に精通しなければ読解しがたく、語句の注釈や現代語訳が求められる。早田哲雄氏『勅修法然上人御伝全講』（昭和四十二～四十七年刊、西念寺）、村瀬秀雄氏『全訳法然上人勅修御伝』（昭和五十七年刊、常念寺）、大橋俊雄氏『法然上人伝』（平成六年刊、春秋社）などが出版されている。いずれも原文と現代語訳の対照ができるが、なかでも早田哲雄氏の現代語訳（「通釈」）が優れている。しかも早田氏の「注解」は懇切丁寧を極め、初学者には必須の文献となっている。だがしかし、早田氏は例えば、

すべて親しきも疎も貴も賤も、人にすきたる往生のあたはなし。（第二〇巻第一段）

という原文を、

総べて親しきもうときも、尊きも卑しきも、人に過ぎたる往生のあたはなし。（五一二頁）

と表記を改変している。原文の仮名遣いは往々にして間違っているが、それを正しい歴史的仮名遣いに改めるな

ど、国文学者としての見識によるのであろうが、原文主義に徹していない憾みがある。

本書はこうした問題点を克服すべく、原文主義を貫きつつ、現代人に読解の便を図るために、難読の漢語には振り仮名を付け、仮名語には傍注にて漢字を記するなど工夫を凝らした（詳しくは凡例を参照）。

⊙著者略歴⊙

中井　真孝(なかい　しんこう)

1943年　滋賀県生
1972年　大阪大学大学院文学研究科博士課程(国史学専攻)修了
1985年　佛教大学文学部教授
1991年　文学博士(佛教大学)
1999年　佛教大学学長
2012年　学校法人佛教教育学園理事長
著書：『日本古代の仏教と民衆』(評論社)『日本古代仏教制度史の研究』(法藏館)『行基と古代仏教』(永田文昌堂)『朝鮮と日本の古代仏教』(東方出版)『法然伝と浄土宗史の研究』(思文閣出版)『日本の名僧⑦ 念仏の聖者　法然』(編，吉川弘文館)『法然絵伝を読む』(思文閣出版)『法然上人絵伝集成』[1]～[3](監修，浄土宗)『絵伝にみる法然上人の生涯』(法藏館)

新訂 法然上人絵伝(しんてい ほうねんしようにん えでん)

2012(平成24)年9月10日発行

定価：本体2,800円(税別)

校注者　中井真孝
発行者　田中　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-751-1781(代表)

印刷・製本　株式会社 図書印刷 同朋舎

© S. Nakai
ISBN978-4-7842-1654-3　C3013